不登校対応事例

ある小学校の取組（学校の組織的な取組）

経　緯

３年生３学期から休みがちになり、４年生になっても登校しにくい状況が続くが、保護者がどうにかして登校させようとする。「いじめ･不登校対策指導員」が迎えに行き、登校するものの別室で過ごす。２学期以降は休むことが多くなり、３学期後半には、登校しなくなる。

５年生になり、週に２・３日別室登校するようになる。２学期後半から、友達の誘いで教室に入ることもできるようになり、気の合う友達ができる。６年生になると母親と登下校するようになる。週に３日の登校は続くが、気の合う友達が増えて、登校したら教室で過ごすことができるようになる。中学校に入学後は、毎日登校している。

具体的な対応【教育相談会議での話し合い】

初　期：母親との関係が希薄と考えられるため、登校を主目標としないで、本人と母親の関係の修復を大切にしていくことを確認。そのために、まず学級担任が母親とつながっていくことから始める。家庭訪問では、どう対応してよいのかわからず戸惑う母親の声を丁寧に聞いて、家庭内でできることを一緒に考えていくようにする。本人の迎えや別室での対応は、いじめ･不登校対策指導員が行う。

中　期：母親の様子の報告を受け、教育相談（カウンセリング）を勧めることにする。初めは、市の適応指導教室での相談だったが、母親の希望で進学予定の中学校のカウンセラーを紹介する。学級担任は、家庭訪問で母親との繋がりを深めて行くことを確認。

回復期：学級担任からの報告が中心となる。学校での活動範囲が広がる。他の教職員への共通理解を図る。

【教育相談会議について】

月に１回の開催を基本とする。学級担任の希望や児童の実態により臨時で開くこともできる。生徒指導主任と養護教諭が中心となって運営。

メンバー：学校長、教頭、生徒指導主任、養護教諭、教務主任、特別支援コーディネーター、いじめ・不登校対策指導員（市費）、各学年代表、学級担任

教育相談会議についての学級担任の感想

・いろいろと話を聞いてもらえるので、精神的に楽になる。
・悩みながら取り組んでいることに対して意見をもらえるので、安心する。
・報告をする必要があるので、記録をこまめにとったり状況をまとめたりするので、自分でも整理がつく。
・役割分担を考えてもらえるので助かる。
・教育相談などの外部機関を教えてもらえるので、保護者に勧めやすい。